

1.研修プログラムの名称

病理診断科研修プログラム

2.研修概要（理念・特徴）

どの科に進むとしても、病理像を通じて疾患の病態を把握することは非常に重要で、当科における研修では将来的に役立つ病理診断の基礎を学ぶ。当施設では、国内屈指の指導スタッフと症例数（組織診：年間約 16,000 件、細胞診：年間約 24,000 件）を誇っており、最先端で高レベルの病理組織診断、細胞診断、病理解剖、電子顕微鏡診断、及び分子病理学的検査を包括的に研修できる。指導スタッフは、各々異なる分野を専門としているため、本研修プログラムにより、全臓器の病理診断全般にわたって経験することが可能である。また、病理診断に際しては、臨床各科との密なコミュニケーションを重視し、腎臓内科、皮膚科、乳腺科、血液内科と、臨床・病理を交えた定期的なカンファレンスを行っており、これらにも教室員の一人として積極的に参加することが望まれる。

3.一般目標

全科の病理診断に精通することが最終的な目標となる。検体の受付から報告書の作成に至るまでの過程を理解し、以下のような各研修内容を目標とする。

- 1) 顕微鏡による病理診断：まず、正常の組織学を十分に把握した上で、病変の組織像を観察する。正確な病理診断を下すことのみにとどまらず、疾患の本質、病態生理を考察し、臨床医に的確なアドバイスが出来るようになることが望まれる。場合に応じて、特殊染色や免疫組織化学、電顕を併用することや、細胞診断の目的を理解することも含まれる。
- 2) 切り出し：肉眼所見の取り方や検体の切り出しの手技を身につける。
- 3) 術中迅速診断：外科的治療過程における病理診断の意義を理解する。
- 4) 病理解剖（剖検）：全身の解剖学を復習するとともに、疾患の病態生理を理解でき、疾患の発症から死亡に至るまでの流れを把握することができる。
- 5) CPC：病理解剖を行った症例は、CPC の場で自ら発表することにより、スライド作成の方法やプレゼンテーションの仕方を学ぶ。

4.具体的目標

検体の取違い防止などの医療安全面にも配慮し、実際の症例における染色結果の解釈ができる。特に、肺癌や胃癌、大腸癌の3項目については、自ら病理診断報告書を作成することを必須とする。その他の腫瘍や、非腫瘍性疾患（大動脈瘤や胆石症、肺炎など）についても、生検および手術標本や剖検症例から学ぶ。

5.指導体制・方略

基本的には1ヶ月間を通じ、指導するオーベンを各自に一人振り分ける。ただし、症例の供覧、迅速診断、カンファレンス、CPC、解剖例などそれぞれの症例により、指導医全員が指導にあたる。

6.週間予定表

	月	火	水	木	金	土
7:30～			乳腺カンファ (毎週)			
9:00～	病理診断科 ミーティング	病理診断科 ミーティング	病理診断科 ミーティング (8:45～)	病理診断科 ミーティング	病理診断科 ミーティング	病理診断科 ミーティング (第 1.3.5 週)
17:00 ～	皮膚カンファ (毎週)		CPC(第 4 週)			
17:30 ～			リンパ腫カンファ (不定週)			

18:30 ～	腎生検カンファ (第2週)		細胞診勉強会 (不定週)			
------------	------------------	--	-----------------	--	--	--

7.研修活動

臨床病理検討会（CPC）：

当科ローテーション時のみならず、自由に参加できる（開催日時については掲示物等を確認のこと）。

8.評価

1) 自己評価

患者記録表、教育的行事の参加記録並びに経験記録表に記録する

EPOC2 を用いて自己評価を行う

研修事後レポートを用いて自己評価を行う

2) 指導医による評価

EPOC2 を用いて評価する

研修事後レポートより評価する

他者評価表を用いて評価する

研修終了時に試験を行い、振り返りをおこなう

3) コメディカルによる評価

EPOC2 又は評価表を用いて評価する

他者評価表を用いて評価する

4) 研修医による評価

EPOC2 を用いて指導医（上級医）、診療科・病棟、研修医療機関、プログラムを評価する

評価表を用いて指導医並びにコメディカルを評価する

9.その他特記事項

実際には、指導医と行動を共にし、その指導下に一緒に検鏡、切り出し、迅速診断、解剖などを行うことになる。